

刊夕 日拾月一拾

常 警 日 報 新 日

定価 一冊五銭 一月五拾五銭 郵費五銭
 原簿五號十二字路一行金五拾銭
 日曜祭日の翌日休刊
 発行所 常 警 日 報 新 日 社
 印刷所 常 警 日 報 新 日 社

赤十字の

起原と沿革 (三)
 平町長 青沼 鋒太郎

かうして歐洲に於ける赤十字社は生まれ来たのであります。我國に於ける赤十字社即ち日本赤十字社は、どうして誕生したのかと申しますと歐洲先進國のそれに刺戟されたとは云へ日本は日本として独自の立場から發生したものであります。

時は明治拾年、九州の南端に突如として現はれた風雲が、遂に西南の亂を捲き起して、拔山蓋世の英傑西郷南洲を城山の露と消えさせたことは、あまりにも著名な史實であります。その西南の役は非常な激戦で

稲の害虫 ずむむしの爲に蒙る損害高は毎年少くとも三千六百萬圓多い年は九千萬圓とは勿體ない話
 ありまして、敵も味方も大變な負傷者が出たのであります。長くも兩陛下を始め奉り、當時の元勳三條、岩倉の兩公も心配されましてなんとか救済の道を講じなければならぬといふことになり、華族社會にも兩公

から懇々と御諭があつたのであります。

その時元老院議官でありました佐野常民伯と同大給恒伯とは、これほど多数の傷病者を救護するには、歐洲諸國に於て行はれてゐる赤十字社と同じ様な團體を作り、民間篤志者の力に依

明日の獻立

- 【朝】味噌汁——玉菜 小付——かぶ干 炊漬
- 【晝】油揚げ甘辛煮 あさづけ
- 【晚】鶏肉鍋——鶏肉 焼豆腐 椎茸 ねぎ

つて當らなければならぬといふことを主唱されたのであります。

佐野伯は佐賀藩から軍艦注文の用務と巴里大博覽會出品の用事を兼ねて慶應三年に洋行され、初めて赤十字社といふものを耳にされたものであります。尤もその頃は歐洲に於ても赤十字社が創設されて日も浅いことでしたから、くわしいことはわからなかつたので、その後明治六年埃太利の博覽會に辦理公使兼副總裁として赴かれ、親しく赤十字組織に就いて見聞され深く感動されて居られたものでありますから、早速同志を糾

合して「博愛社」といふものを起されたのであります。

これが即ち日本赤十字社の發端でありまして、その當時の社則は、第一、戦時の傷者を救ふこと、第二、資金は社員の募金と有志者の寄附金を以てすること、第三、救護員は一定の見易い記章を衣服につけること、第四、敵の傷者も救護すること、第五、官の法則を遵守し陸海軍の指揮を受けること、の五個條でこれこそ今日と雖も動かすことの出来ない赤十字主義に則つたものであります。

新俳句

海鳥

木津 茂太郎

しらなみのとめどなくよせてくるすなをりーとほく船の燈臺のうなばら
 松ばやし磯のほひしてくる
 燈臺、しぶさあがる
 海鳥とぶとほぐみづには足あと防風は砂に生きてゐる
 自轉車で來て海の音してゐる
 海、ひかふに私のやうに自轉車を立てゝながめてゐる人がある
 すゞき、水すみけり

河の朝のこうてゐる娘さんの白いえりあし

白い倉を立て、マリ投げしてゐる

木村外科醫院

自炊入院の便あり

電話三〇九番 平町六丁目橋際

御中食 (ランチ) に

- サロン獨特の御飯物
- ベニエライス (天井) 御一人前.....35 SEN
- 御酒の御肴に サロンベニエ (天ぶら) 御一人前.....30 SEN
- サロングリア (鬼がら焼) 御一人前.....30 SEN
- トデモおいしい天井です トデモおいしい御肴です 是非御試食御最負の程を御願ひいたします
- 出前は迅速にいたします
- 平田町——
- イワキ サロン
- デンワ 352—

の節は是非會館へ、
 独特な奉仕献立
 紅茶 一〇
 一品料理 二〇
 ランチ 五〇
 御宴・御集會・御相談次第
 平町五丁目 本會館

貸切の御用命

ぜひ、三井自動車部へ!!!
 電話六八五番
 ◎乗合は好間、合戸、澤渡方面行

味覺の秋!!

仙の干やなぎ
 賣初めました
 其他鯉節、鯉鹽辛、いか鹽辛
 ★鯉の子入荷致しました★
 平町 土橋
 鈴藏魚店
 電話六六一番

玉屋洋品店
 平町五丁目 電話六五六番

◎通學用金卸外套賣出し (正)

中黒最上	生外	學生黒ラシヤ
一年.....八圓五十錢	一年.....四圓四十錢	一年.....四圓四十錢
二年.....九圓	二年.....四圓七十錢	二年.....四圓七十錢
三年.....九圓五十錢	三年.....五圓	三年.....五圓
四年.....九圓五十錢	四年.....五圓五十錢	四年.....五圓五十錢
五年.....九圓五十錢	五年.....五圓五十錢	五年.....五圓五十錢

△紺ヘル金卸服一年用三圓四十錢
 △男子子供オーバ種々荷揃

店服洋堂札正 (正)
 番六三四電

◆催主社本◆

意氣の戦ひ

平商奮然勝つ

けふ教員リーグ戦の 掉尾を飾る幾變轉!!!

警中 4031122
 一二三四五六七
 平商 4000145
 14A 13

前回のリーグ戦三回目の裏に十對十のシリーズゲームに薄暮球場に押し迫つて惜くもノーゲームを宣せられた警中對平商の教員野球は本日午後一時四十分より磐女櫻ヶ丘グラウンドに於て開始された『我等の先生を勝たせよ』と兩校

生徒が、此の日の来るのを待ちもどかしがつて居たのは勿論だが、それよりも平町の早慶を以つて目ざらる、兩校野球部に範を示し士氣を鼓舞する上に於いて是非共勝たねばならぬ此一戦、勝つも負けるも時の運、戦ひは兵家の常とは云ひながらよそ事にはすまされないけふが

最後の 決算日、異常の感激と興奮とに武者ぶるいして、兩チームがグラウンドに相見えた從つて此の戦ひは寧ろ技量を超越した意氣の戦ひと見るが至當で

ある

此處に、ファンの視聽

は全く集中され固睡をめん球場を見守る時、重々しいサインが晴れ渡つた秋空高く白熱戦展開の序曲を奏し(球)水竹(壘)井上、西牧、海野の審判に依り警中

中 本口村水平澤口谷口
 山越大高下谷野新豊
 警 (遊捕)一(右)左(中)三(投)二
 平 水田川澤松手原部田
 山下武宮若玉菅阿新
 平 (投)中(一)三(遊)三(右)捕(左)

斯くてファンの待望裡に兩軍譲らぬ豫想外の激戦は息詰る幾場面を轉々したが遂に別項スコアの通り榮冠は平商軍の頭上に輝く處となり觀衆の観呼は暫し鳴り止まなかつた、時正に午後三時三十分

炭金坂グラウンドで舉行する参加十數チームに上る見込み
 鮫川工事委員 鮫川水利組合では十一日午前九時から平町團體事務所下工事委員會を開き縣から長瀬事務官出席する
 植田陸上競技 植田方部聯合青年團陸上競技大會は来る二十三日植田小學校で舉行する

教員選手

五十餘名を決定

既報石城郡下小學校教員の陸上競技部及び籠球部に挑戦を申込んだ茨城縣多賀郡小學校教員との第一回戦は愈よ来る廿五日午前十時より警中グラウンドに於いて行はれるので本部教員團では出場選手を詮衡の結果左

- 記五十餘名に決定
 △陸上競技(百米)木田谷平 大沼藤明 小林正毅 渡邊彌平(二百米)草野仁 渡邊彌平 小林清海 佐藤吉雄(四百米)鈴木武雄 佐藤定翁 木田勝男 渡邊彌平(八百米)鈴木五郎 菅野貞信 木田勝男 佐藤定翁(四百欄走)田子泰

北目火防役員 平町北目町火防組では此程火防組役員を左の如く決定した 組長鈴木福司、副組長鈴木祥友、部長草野一郎

高麗橋を中心として

眞木翁の懷古事談

六、六間門櫓と高麗門

懐しい扉の乳房頭 土藏風の白壁造り 舊平城の本丸への本道は廣小路の大廣場より、六間門に通ずるの道路が、其入口であつて、先づ第一に、此通路を喰止めて居つたのが、六間門櫓でもあり、其外張なる、高麗門でもある

六間門櫓は、矢張本道の大手門櫓、中門櫓と、其規模は略似寄つて居つたもの如くで、東西兩側より、乗出した石崖上に、掛け互したかの様に見えし、南面した櫓で、此左右の石崖の、櫓下の間隔は、約五間もあつたであらう、其中央三間話りが、通路となり、大きな(乳房頭)が、四つ宛附いた扉が、左右の大柱に取付

渡邊村賑ふ

品評會其他 諸會合開催

渡邊村農會及び小學校産業組合聯合の農産物品評會は來月一日より三日間同村小學校並に農業倉庫の二會場に催されるが三日には賞状

授與式の外小學生の成績展覽會、母の會、バザー等が小學校に開かれるので前景氣が好いと
 克己日に弓道 警中は今日日(克己)日國民精神作興に關する詔書奉讀式後校内弓道大會を開催すると

社見免し難き 明日の一戦

本社主催中等學校教員野球大會の續行試合は別項の如く平商軍の勝利に歸したる結果参加各チームは何れも一勝一敗の戦績となつた爲め更に明十一日午前八時を期し警女グラウンドに於いてトーナメントに依り決勝戦を開始する事となつた、中等教員チームの覇者果して何れか? 明日の最後の一戦こそ見免し難き興味の最高峯と云ふべきでありファンの御來觀を切望して止まぬ

壁で塗塗めてあつた、大屋根も、勿論瓦葺で、大きな鯨が、上に取付られ、何處となく壯大で、又威容のあつた門でもあつた、最近の、高麗橋數道の取擴げで、此門の、東の石崖の、根石などが掘出されたが、尙路面等を少し掘下ぐれば史蹟の礎が、幾つが出るかも知れない
 柳形の空地を圍む 六間門に矢潤の乳房頭、直角に、柳形の空地を圍んで其前門なる高麗門が、廣小路對し

一人者が

一日十三回

電話を使用する

平均で調査した平均率

平郵便局で最近調査した市内電話加入者七十名が一日に電話を使用する回数は一八千九百廿九回で一人は平均一日に十三回づつ交換局を呼出して居る譯であるこの外市外通話が一

神酒と赤飯で

簡素な入營送別

平窪村で二次會を禁止

平窪村では今年度入營兵十三名のため十六日午後三時から同村小學校で送別會を行ふが時節柄酒折詰辨當を廢し赤飯の「お握り」にお神酒一杯だけといふ粗宴で終始することに決議堅く二次會を禁止する、尙ほ今年からは同校内の御眞影奉安庫前に一同整列謹んで入營奉告祭を行ひ大君への忠誠を誓ふことになつた

校外監督

範圍擴大協議

既報平町内各小學校の校外取締協議會は昨日午後二時半より警中會議室に開き平商校より提出された「本協議會の目的を校外監督のみに止めず其の範圍を擴張せられては如何」に就いて種

五百五十一俵、等外二百五十五俵合計四百七十二俵で最近にない大量であると

苗代漬地

圓滿に解決

八帆入橋の工事に際し縣道泉上植田線泉村地内藤原川に架かる八帆入橋は最近腐朽甚だしく通行頗る危険に陥つたので目下施工中の藤原川改修工事の附帯事業として架替えることに決定したところその工事のため苗代三反歩が漬地となつたため地主の反對が起り紛糾を續けて来たが小林平土木監督所長の斡旋で此程圓滿解決を見たので近く着工の運びとなつた

植竹翁の

追悼會日時

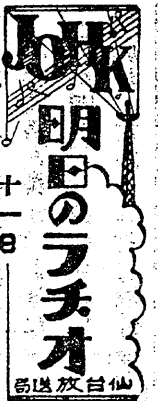
既報植竹源太郎翁夫妻の追悼會は十五日午後二時長源寺に於いて執行と決定尙遺骨は翌十六日午前七時廿五分平窪發同日午後二時總持寺に於て葬儀執行すると

職業紹介所の利用を望む

けふ宣傳日に當局談

氣遣ふ除隊兵の就職

本日全國一齊に行はれる職業紹介日に當り青沼町長及び四家職業紹介所長は交々左記の如く語つた時局匡救事業の爲めに失業者は幾分緩和されて居るが就職斡施を準備をす



明日の天気 西の風晴曇半す

今晩の部

- 後六〇〇 (子供の時間) 管絃樂 日本放送交響樂團
- 後六二五 英語講座 (四の五) 舟橋 雄
- 後七三〇 講演「國民精神與詔勅」 渙發十一周年記念日に當りて
- 中央教化團體聯合會長 海軍大將子爵 齊藤實
- 後七四〇 講演「特別大演習に就て」 陸軍特別大
- 後八〇〇 (子供の時間) 陸軍中將 山田 乙三
- 後八一〇 琵琶 前橋高等女學校生徒
- 後八二五 豊田 静芭
- 後八三五 尺八と俚謡 山形縣東置賜郡沖郷村
- 後九〇〇 時事解説 京大教授法學博士 神戶 正雄
- 後九三〇 時報 ニュー

採用申込みが

相次いで来る

平商卒業生の就職口は景氣の好い日立製作所をトツプとしその後各方面より續々採用申込みあり昨年の今頃と比較するとその數が斷然増加して居るので學

本年は頗る有望

開始する由

- 大阪福井商店 同江原商店
- 東京明治火災 同安田銀行
- 同三井物産 同インバイヤ自動車商會
- 茨城日立鐵山 同日立製作所

警部補派出所

小名濱で新築

小名濱町警部補派出所は最近腐朽甚しくなつたので小

氣象通報

明日の部

- 後七四〇 陸軍特別大演習實況第一日 演習現地より中繼
- 後八〇〇 季節料理團體の大根御飯と兎肉料理糧友會
- 後九三〇 第三回兒童唱歌コンクール 全國各小學校生徒
- 前一〇〇〇 講演「最近の國際關係と國際法」 法學博士 末廣重雄
- 後一〇五〇 滿洲より講演「滿洲國司法部の現狀」 司法部總務司長吉田正武
- 後一二〇〇 映畫劇 乙女心
- 三人姉妹 P.G.L 現代劇部
- 後一五〇 野球試合實況 日本對抗戰神宮球場より中繼 野球無時映畫の午後
- 後五三五 農山漁村經濟更生實績講座 永松陽一
- 後六〇〇 子供の時間 名作物語「イワンの馬鹿」
- 後七三〇 臺北より講演「南洋の日本町」 村上直次郎
- 後八〇〇 ラヂオドラマ サルターチ女王の御前奔
- 後八三〇 東海道演藝道中 一五草津大正座中繼

陸上競技の記録

警中體育大會の結果

既報體育デーの催として陸上競技、排球、籠球、水泳、庭球の五種目のクラス對抗體育大會を開いた警中の賞状授與式は本日午前十時より同校講堂に於て舉行され、たが三年一組が總得点二十五点を挙げ榮ある優勝旗を獲得した尙陸上競技の各種目に於ける最高記録者は左の如し

- ▲百米一二秒八二 佐藤 正 同三年吉野八十榮
- ▲同四年丹野幾之助 ▲二
- ▲同五年新妻 ▲三
- ▲同四年 ▲四
- ▲同五年 ▲五
- ▲同四年 ▲六
- ▲同五年 ▲七
- ▲同四年 ▲八
- ▲同五年 ▲九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二
- ▲同五年 ▲七三
- ▲同四年 ▲七四
- ▲同五年 ▲七五
- ▲同四年 ▲七六
- ▲同五年 ▲七七
- ▲同四年 ▲七八
- ▲同五年 ▲七九
- ▲同四年 ▲八〇
- ▲同五年 ▲八一
- ▲同四年 ▲八二
- ▲同五年 ▲八三
- ▲同四年 ▲八四
- ▲同五年 ▲八五
- ▲同四年 ▲八六
- ▲同五年 ▲八七
- ▲同四年 ▲八八
- ▲同五年 ▲八九
- ▲同四年 ▲九〇
- ▲同五年 ▲九一
- ▲同四年 ▲九二
- ▲同五年 ▲九三
- ▲同四年 ▲九四
- ▲同五年 ▲九五
- ▲同四年 ▲九六
- ▲同五年 ▲九七
- ▲同四年 ▲九八
- ▲同五年 ▲九九
- ▲同四年 ▲一〇〇
- ▲同五年 ▲一〇一
- ▲同四年 ▲一〇二
- ▲同五年 ▲一〇三
- ▲同四年 ▲一〇四
- ▲同五年 ▲一〇五
- ▲同四年 ▲一〇六
- ▲同五年 ▲一〇七
- ▲同四年 ▲一〇八
- ▲同五年 ▲一〇九
- ▲同四年 ▲一〇
- ▲同五年 ▲一一
- ▲同四年 ▲一二
- ▲同五年 ▲一三
- ▲同四年 ▲一四
- ▲同五年 ▲一五
- ▲同四年 ▲一六
- ▲同五年 ▲一七
- ▲同四年 ▲一八
- ▲同五年 ▲一九
- ▲同四年 ▲二〇
- ▲同五年 ▲二一
- ▲同四年 ▲二二
- ▲同五年 ▲二三
- ▲同四年 ▲二四
- ▲同五年 ▲二五
- ▲同四年 ▲二六
- ▲同五年 ▲二七
- ▲同四年 ▲二八
- ▲同五年 ▲二九
- ▲同四年 ▲三〇
- ▲同五年 ▲三一
- ▲同四年 ▲三二
- ▲同五年 ▲三三
- ▲同四年 ▲三四
- ▲同五年 ▲三五
- ▲同四年 ▲三六
- ▲同五年 ▲三七
- ▲同四年 ▲三八
- ▲同五年 ▲三九
- ▲同四年 ▲四〇
- ▲同五年 ▲四一
- ▲同四年 ▲四二
- ▲同五年 ▲四三
- ▲同四年 ▲四四
- ▲同五年 ▲四五
- ▲同四年 ▲四六
- ▲同五年 ▲四七
- ▲同四年 ▲四八
- ▲同五年 ▲四九
- ▲同四年 ▲五〇
- ▲同五年 ▲五一
- ▲同四年 ▲五二
- ▲同五年 ▲五三
- ▲同四年 ▲五四
- ▲同五年 ▲五五
- ▲同四年 ▲五六
- ▲同五年 ▲五七
- ▲同四年 ▲五八
- ▲同五年 ▲五九
- ▲同四年 ▲六〇
- ▲同五年 ▲六一
- ▲同四年 ▲六二
- ▲同五年 ▲六三
- ▲同四年 ▲六四
- ▲同五年 ▲六五
- ▲同四年 ▲六六
- ▲同五年 ▲六七
- ▲同四年 ▲六八
- ▲同五年 ▲六九
- ▲同四年 ▲七〇
- ▲同五年 ▲七一
- ▲同四年 ▲七二



田邊南龍(作) 山本英春(監)

一八〇:

権兵衛喜三郎の仲裁
さて二人の侍は大地に面
を押すやうにしたし

「誠に親分方のお助けを以
て吾々共兩人酷い耻を搔く
處を耻を搔かずに済みまし
た、何うか親方、私共は……」

「イヤ、且那方然う地下
へ手をお突き下すつちやア
痛み入ります、譬ひ何ん
も貴郎はお侍、小共共は見
る影もない下素下郎、何う
ぞお手をお上げ下さい、素
町人の私共が貴郎方に禮を
厚くされては甚だ迷惑でござ
いますから、サア、モ
ー其のお禮には、及びませ
ん」

「ハイ……」

「ハイ辱のふござる」
「且那へ貴郎も未だお年が
若えが小共もまだ青二才、
こんな生意氣なことを申し
上げちやア済みませんが、
以來は餘り混雑の場所へ來
て御酒を分に過ぎて召上つ
て、人が驚くから好いワと
云つて決して刀などを鞘拂
ひを遊ばしちやアなりませ
ん、決してモ、貴郎方のお
名前を承はるにも及びませ
ん、又承はつた處で不實な
申條だが別に用のない身體
然し又、何んな御縁止が



るめえもんでもございませ
んが何うか以來はお心注
下さいまし」
権兵衛喜三郎の兩人が叮
嚀に扱ひをして呉れるから
二人のお武家は有難涙に暮
れて自分の姓名、主人の名

が彼方に立つて居やアがつ
て口惜ぢやアねえか」と
頻りに云つて居やアがつた
が、萬一三奴め飛出したら
此方も三人で飛出して一番
非道い目に逢はして呉れや
うと思つたが、遂々三人は
出づに仕舞ひア、腕がム
ズ、して仕やうがねえ」
「俺も腕がムズ、する……
……惜しいことをした」
大變な人達だ、昔は斯う
いふ人ばかり揃つて居たん
で騒動は絶えない、
「マア、誰も怪俄をしな

をも名乗らず鼠舞をして兩
人共戻つて行きました、権
兵衛と喜三郎は茶見世へ歸
つて來て

「イヤ、大きにお待遠様で
げした」
「ハ、ハ、皆んな旨くやつ
たなア、水野をはじめ三人

ふ奴、已此の儘にはいたし
て置くべきか」
と密かにお旗本仲間へも
それ、お法令を廻してあ
る。
時しも正徳二年五月下旬
のこと、喜三郎はたつた一
人で長脇差を打込んで、薩
摩絣の單衣物を着て献上博
多の帯を締め、駒下駄ばき
でブラリリ、と本所北割
下水をお厩の渡船の方へ來
ると、後からバタバタ、と
飛んで來た一人の男、足
音が激しく聞えるから何事
かと振かへつた途端、ド
ンと突當らうとしたします
からヒラリ體を捻る、其男
は其儘ドン、と駈けて行く
「粗忽な奴があつたもんだ
向ふ見ずに飛んで來やアが
つて俺の方で除けなけりや
突當る積りだらう、馬鹿野
郎、油断のならねえこつた」
と喜三郎は油断をしない
でスタ、歩いて參ります

タクシーは尼子へ!
車体優美—御用命は親切
迅速をモットーに!
尼子タクシー
電六四〇番
洗練されたサービスは完全に皆様の
御用を果します

中村齒科醫院
平町 鍛冶町 七

美味!
芳醇!
宗正らひた
山崎合名會社
電話一〇番

中村齒科醫院
平町 鍛冶町 七

木村病院
平町新川町十九
電話六四番

入院隨意
病室完備

外科 醫學博士 内木宗八
藥局 藥劑師 立番彌一

産人科 院長 木村寅次郎

貴方の御家庭に
本會を御利用下さい
直に家政婦を派出します

親切 料金は極めて低廉で
町寧 妊産婦の御家庭
御病人の付添 お留守 居番
炊事 や 雜用 年寄やお子さんの付添

派出所に付會員至急募集
平町紺屋町二(電話二二番)
上原家政婦會
會主 産婆 上原通子

米國製剝皮膚病良藥
レメドール
子宮あたゝめぐすり
宮温湯
丹波博士創製セキドメ

阿康藥舖
平町 古鍛冶町一〇
縣社ノ下 電話四四

ハタケ、ヤケド、キリキ
ズ、タムシ
子宮病、根切藥、下腹や
腰の痛みをなほす事妙な
うまくてセキがヨクトマ
ル
ユビハレ、ヤケド、キリ
キズ、淋病、梅毒、乳ハ
レ、すべて化膿したものを
を切らずに癒る